一休水かゝ見

2034

水滸

一休作

全

ハ5
2034
特

遠
2·034

特 2034

小倉藩
玉井文庫

きてうのちとせを為ん事とぞおもふ
ものぞんぜいまーーーーせいりのぎうへ
わまをみてをひさーくたりぬすみまーれ
をーのひめまついくよ代為ぬらん
めをーどちくーどちくーーーーまーまーせどうもくん
かんーちのぢーりちやーんいかーーーーーるーひ
をーーーめのぶ母をたれとりやせいぜんのづーーーーかなふ
ものぞいーをーうんといかーーーーーーーーーーーーさ
れべくーーーーーーーーーーーー

りんらいをなげいつゝ　今われる身ぞ
ちゝはゝゆくゝとも　ぞ　ものもうもをも
世の中のうめぐ　ちゝはゝやるれい
人をほゝけるぞ　ものもほぐ
ゆゝ水のうずかくちゝもとの　ものを
ほゝけをゑのもじ　人ものちれ世
と海でいいびゝとぬぶ　ぬぐ海の
ちゝのうちふるゆ　あゝ人さ
う世ををけさ　地ぐるれいろ　ものを
なれ中ちゝ　ちゝやういぐせん
世れ中の人のちゝ　ろれほゝけるまぐ

ちゝやゝあみゝのもれわゝひゝる
ちゝ　ゝをゝちゝをちゝぬれりひてふ
むまれぬさゝのもれとなゆへ
人ものゝとゝいるゝや　ゝ　ゝ　ゝ

のをすれどもやくすべきものにあらぬ
やくへんじてくすりやくるるものをすれを
けしけるやるん

たくさんをくつきのもくこうとあるるもの
ろんまのちやうふけをとるる
くわをあんずるふぐりをとるくず。れやや
いふりのふぐりんをり。六代ざう紙ハみかあんぐんを
いるあんぐあたりあるくれもやうどのやうろく
のうそ成つきてをいて。ぷれをうぶと人ぐりるの
ともびぐりやちやうもの白いきんの紙よいまの
一位ぢやうだうりん者ぢんかうい第ぢ風ぢ

くいだやうぢの茶ぢ末さ人ほとけはなとなる
あんぎんいりのをうぶず。むくくあいてぷ
うをあみぐをみかけきやとぷやてきてぐ
うをはれてとるかぷうるもまをぷりれて
ろぷやうぢいみぐり。花ぷくれる弁。あくれり鴉の玄
のまくこやく

水かゝん

りんうんぢやうじをたれまてうかるれぬさこゝ
ろうもるぐさこゝろのり。三世のゝくなり。
あんとしのいづくともるくいでぬまゝバ父母こゝやう
いぎんぽんらいをるぐゆめくぼのゝうとやうん
ひあをもちゝずなかるうんとあんずへまゝび。
こゞなかもちゝぬちゝうがほゝけるりをゝ
とゝかのいあゝかもあゝびなこゝもあゝずゝちと
まもあまゝバありともるゝとちゝぬゝまるり。ゝこゝい
八万ちこゝやうをみるふぼゝけるうんずゝん
すゝゝをるゝどうくゝうゝこゝゝゝるゝゝおるゝゝ

こゝるゝてくるのそゝへあゝふゝともゝ
くゝんのこゝやうをゝるのまれいせひ
ちゝやこゝいゝちゝるのう世よ出て
れゆくのものをまゝちすゝうの
をいはせ抱いひゝてをこゝ生いをやう死いゝ。花い
花水いゝつ墨いくこゝつちいはゝり
あゝあゝれゆこゝやこゝりとをこゝちゝん
とゝれこれるゝるゝふゝうのゝう
わをこゝれなかるのゝくゝぼちやゝゝちゝりまで
こゝゝべゝぢゝるゝもゝこゝれぬこゝちいをゝり
ちゝゝもゝいるゝ仏ものをゝかやゝん

すこしのかうさうまつ風のおと
ちるはなびらくくとてあらやんぷくくと
てはしきやうん
ありしみをもひとつのだのこそて
をとつのあらひつる
をのまさへあいまきらぬふぐうめり
あくまうぬくむとうりうり
なれあとのうるはいれるれ
あるんの代はちやうすられう
あさ雪をこれとりてをあるべし
たまちこれ世はのこりまつへさ

けるぬ井ふたまちぬ水のなかちて
かけもうちもたれすのそくむ
めをもはてはよとられぬ月のうの
うれ雲ことれそをあるる
まんかうをはうん人とのはとさ
れをりてうをいくらふのむ
ちやうさうのうちうめをせてかきたる
とをちうれしぬるすれぬ山もう
る人をのちやうみぐもれはるとそ人の
ちやうけつぐすそ入
をもすうかけのみちをうぬまも

ワラあるころをいりめら
なるひいまだ人をワラ男をそれらし
うらろはるふあまら物をけまては
あらねとて宮ふいふうろるさるものを
はとくたるのはとうるるん
なふ事をむるるきゆめとさくものを
さあぬうろをなけきろうぬ
ワれりをいてそいるぬるるの形を
ひくをてちりてはちあくをるまを

二人ひくふ
あふびくふふさてあり又びくふさうり
ものがうりていくうふはうりうろをそあ
てふくれごくなりはまてもまくこ大事の
ねんろんをるずびくふとるくるぶはくふ
るくとなるひこれまでぬりてはぶびをのい
てくろえはやうふはまあれとうふこあへて
いくくづくるれこくなりのへどもんてり
のもれるそはりるくくぶんぢうれワをくろ
ごくくへしぶれもやりじぶまんろのあんぢん
をくびるるふまるねくちぢくのまう移んるを

おとりてづづうぶせきんまちやくするあかりぜうん
まちやくするまうんをひろげくさぐきくさぐきをま
ちやくすうぬんをきやうずぐれひとくさぐきうんの
きしるいてれをぎてぐぶゆくよみぐりあぜんあ
くのうろうぶきてぐぶきてるぶぶろうぶひとりぶ
きりのきうをきるまてぐりてきんがうのぶうね
もぐぶきてぐれうろをきをてぐきりのひん
きれこれるり猫のいのちをころてぶぢぐう
れらぎんどんまてぐきだうのれちぶをきび
してきちくきやうぐうよりちぐきくきてぐろ
ぶぐうふりぶういをあらてきぶんぐんり

むまれぢうのきうりて天じやうふむまれ
をおぐきといふかりぐこのうくよぶやうぐくりくく
ずうとこみぶこれ一ぶんをうりみるぶとうぐく
きうきうきをくぐみうぐきうのうをあぶれこりきき
ぶぢきめをくぐいてきぶをうりをくぐ中
ぎんきぐ位ぶきをぐぐれぐぐねんりれこれ
きうのずうのうりぶきうけをぐこきふるけきぶ
ぶぐひうきむ色きぶをくぐ流じやうむるれ
むぐきうぶすづぐきうきうをうぐぐきうのう
うのごくぐうづのうくあきにふうりぐれる
きうれ一ぬんをむうぐきゆくよぢすぶの万じ

を面こゝろあらずとゝのちゝ一ぬんのわうぶまん
わうをるく。面んぼうの分ふぶ一ぬんをるぬんと。
ほうせぶひとつまてごとくをむるゝきたり。一
さりのものをんちゝをれみおむるゝとれるのぬんの。
れこ面をもむるゝきとれるのべうひむるゝともの
ありつぶごとゝろをぶのゝともれるのべうひぶさてを
一さりの物ぶぶのゝともあゝやをれるつぶろゝろ
をぶのゝともを又れるりびゝてぶはゝよぶぜんすべゝ。
とゝていちゝんのちゝぶぬぶたるものまてゝやや。
こゝんていちゝわれゝをこれぬちんをゝそるゝ
ぬをゝんゝ乃父母ぬぶやうちのごとゝぶゝはい

いゝの母ひゝぶるりぶこれをけゝそれうちゝ者
いをうぶたゝまるの所ゝるぶゝとゝぶちゝもゝれあ
あゝとゝゝろぶやゝちのりぶふぶうちありせてぶ乃い
けゝゝごとゝんをいゝゝたりぶれむぶやゝちゝぶゆんを
さものたれぶぶ所ふたゝてゝゝあゝとれぶ乃玄
やゝてゝさゆゝたりぶちゝもゝをぶゝめたりゝゝ更
ふぶ所ふもるゝゝさるりぶちゝれどもがんちゝのゝゝ話
ちぶせゝさ中の乃れぶのゆゝる中をるゝぎゆゝる中
をたれゝゝごとゝんゝくゝゝたゝくゝゝこゝちゝんゝやう
しゝてぶあゝれ中をるゝ。あまゝる中をたれゝり。
とゝていちゝんゝたふをものゝぶゝぶゝるのちゝや

こゝへていてくべのちゝろハろんまゝりてゞでゝろ
をのゝりゞそれたこゆこゝろをちゝろあゆありとれ
ゆひてゞぜんあくをわをこの二ゆろこゝろをゝとし
てゞこゝろゝゝろゆ梅事をむゞゝろこびてゞゝんろゝゝ心
ゝゝろゆいさゝゝ事をゞゝゝゝうちてゞゞゞくのゝハゝゝを
うきゝなりゞされゞゝゝろゝゝろよゝゝゝ

こびこくるれでぽんがんの田地とハいふるぷるゐ
れゆへぽんがんといふがゐれでぷさいのさるりくべ
みゐ地ちりちやうびぷさいのいろぷこくるりづる
ゐゆへゐのがりのこくへをもちてぷんがんれ田地とハ
ゆきなり

ひくこゐまをこるれてみまハ花をもゐ
花をもまをひろこくゐ地ゐりゐりくり
こひうこれちろをもちうゆちるべぷむゐ花こ
くこちりぷさいのいろをいぶひ神ぷぶさるゐちゐ
のこにあこびぷゐつ秋をのさこりくのいろのころ
うりゐ神をもちこへしゐ

とゐていこくぶ西のをいぶろさいすこぶりんこて
ここへていこくぶれほぶこの神ぷこゐまでをな
神ゐりうこをそりぷころもをこりてあこびぷこち
けさこりぷこゐつべこぶゐこふゐひとのこどに
ちてでけぶさをすべぷゆくくこりへすつべう
ゐびぶこんなのそうをぶくやうすこやうをれでぷ
一ちんをぶゐくやうすれでぷそれこりぷこゐまり
ゐりとれゐふゐ西のををこうやうをゐこぶまりや
をこうすをしむせをけくくのりんとすこそうをぶこん
ゐをもちぶくゐれたべしゐ
ゐうこぶこぷやうゐぶこん秋ぷ一へゐべこや

こゝへていくばくかふもやうほんげんのくふう
をなすべしあるひといふこゝろあるかをあらは
まうもどやのこゝろかふかうやうなるこゝろをもん
ばべしとうやうかいふかんのくゝろやうだらふ
とずべてあるてびうづわづかうろのみるとなるさ
とりのまべさいしもどやうをすくべしごれゆへ
ふごうろぎひまうもどやのみまうぎうべうずいう
なるゆへそとゝいふまべさいのほとけとゝもどやう
ゝゝみるまがうしたくゆへなり
ゝゝふうろさいのこゝろふすぐれさうふむろんのこゝ
うゝもどうづさうもてうこゝものれさうろうふゆゝ

一ゝんのほ弁てよ一大事のうゝれをうひてき
すうゆへなり
ゝうのていくゝ人のもうふはゆふうやうふすりはや。
こゝ魚ていくゝぶぶのをわまてゆゝはすりぶぶい
とゝいふハ地水火風すりゝ人ごゝふごゝれをゝうる魚
ゝゝうるゝゝぶれもゝぶゝゝ風分のあゝてうるれは
ひ分のうゝをひうあゝ水すりごの分やゝゝ也
うづゝをゝてほ弁ふはゝちとゝゝうごれはあ也
ゝゝてゝどゝまうりのすゝゝゝぶゝりうてうゝをゝ
みゝゝ紀ぶりふつゝゝゝるすりゝ人ゝゝりれま
なゝゝりゝ面ゝひのゝものをゝれゝどゝやうぶうゆ

とみつゆへいぶくれごとくよはんてうを

なふ事をもみおいていりり乃世の事に

ちかるといつをもゆこと有う祈を

これをねもやうねもものうすりといふまり

そつていまくいつまをもまことのゆのうとやや

こゑへていくゆりうをもまぎやうすとハぶの

やうなるねよあくびづひぐ事をやぶうり

ひぐ事といつハいこぼんもやうれぼさうをいふ

たりゆうひとハぎうひちうとハぎうり元といい

ちゑじやうぼとうぼけるりこのれもひをや

きバをのづくりんゆんちづくをいまぐ紀

をまきうひをいくひちうをうやこがんゆ

まるれてぼうけをもむうこゑ為ありこのゆま

ようへられてぼんぐんのほうけをぐうまるり

りんゆんのりけをちうをうきうこうまいて

をいひぎうこんぐうのちやうをうやうもいふ紀

ひいぐうんじんもいふりんらいのめんもくまぐ。

やうをみおこれりんぐんの西ぢ乃ふまり。ぐさい

のいろうちあうをのなみかりんぐんようゆひ

べいぐさうのいゆうちあうちのハゆうひのいち

移んこりちやうじてゆこうふあうまりのようあう

ぐみおりあうのたりづまぐ紀の人ぐれ里

をきくんしてぐべよむとひてぐぜんすると四ぐちん
よりておこぐ弱んぐぐ面ことぬあぐぐきり
をきくぐぐで一さいの事ぐ紙おすぐぐをぐ乃そうと
おすひぐゆうひのまくもんをおこぐとうちちう
ひてだなの事をぐおいぬすのようちんとてずて
きぐのうれむぐまうくとうてねむぐきくう移て
あてぐむぐてうぐぐうの事ぐあぐてきくうれむぐ乃中
よいでくうの事おうれぐこれをうれぐ事やうんあく。
ううぐひぐぬんのおこぐ紀ぐ紀ぐ人のことぐを
こうあんすてこれすてまくぐゆんをきくきくんと
すくうんをありぐ人のこうあんを人よあくうく

をくやうのようのあくびぐぐりんぬんをきく
ぬ人よぐ人のぐんぐんよりすくーと紀のごと
をぐうちちゆ人よぐ人くやくよいうやうんとくぐ
もくめてこれをこうあんすくーぐ移きんをとを
まてぐんぐんようぐ乃きくあんたあるりこれくろ
をこくてぐいこりんせいのいをやめぐをのづく。
ほんぐんよちくぐくべーぐおくくを紀くこ乃まく。
をんるもをんなのまくくすてぐ乃ヌををきく移
をもぐくあるくこ事をきくりてぐくのるりて
のそむくくちるくぐ四ごぐやう紀するをぐ中事
まんをよくくんてぐぜんるんーぐぜんぬ人とぐと

きこれをはめるぶぶでひのみくをもろんようてぶ
くろゆへよゆこそゆこそみれまがりなれむいや
ゆべきゆこそこの身をもあるもろもるれるぶこれほど
のまりつの身をもりていたりめてあつかるまま
をいまめてぶろくこのさやうよとれるかをこの
ゆへのごくすてぶくしてあまりさんこのさやう
をこそて身をいるをものぶでらほ毒のれうろ
よくるゆへさやぶこそんすん人のたまをゆこさて
下人はたくりこんはぶこのげんどんごん
ゆてゆこのようじをいぶんしてこれをまゆ
とりいてこぶまこくゆ毒しくぶ毒うへ日後

ゆこもぶうでらぶそれゆものころよりんや
もあゆのころりよこそふゆ毒しぶのりうも又う
のごくぶいまとれきやうをすむ人をみ毒ぶのの
きやうのゆへのごくよいふうまりぶてかけ
のいまめたまふぶこやうるものこあふぶこりきやう
をうこそゆのきんをすこそまりてものを
こひそそまりぶでうほく毒のれうろよるふ
べきやぶやうの人りうろよごうもんしてぶらぶ
るんぶりゆまうるてんとてゆのりようむくま
をきりんや神はこ神のりるまこあこと
まをきりゆきりうハぶんあんまそぶんぶんち

三りのとうありてこれよりてびごくおれりたい
おげきをのぶ三ぬりのくるまこありといふなり。
らんといむさうりうきんとハいうまちとぶらりあり
きりぬりのりくをきくすしてこのこりのこうとれ
これをまりめるふうりりつまごこうの人りぬきうを
すいみぶぬりきんのれあくりうようむくりりのこれり。
されむこれほどふ人りありりのおよふやこよりか
きりぬりのきんりはこうくりふれうけるれゆへうりり
やうの人りぬりのきんをきんずるふりのきんりようう
きりうりあくずりこうりりぬりのきんをり
ずるこれりこほくりけりのりぐこよりくりりまくこと

やうをきりこれよりてたやうじをるきんと
きりひとへよりくけりれをんりよあくすやこのりくに
むりくりりふりりりくりりをうせむりりこくふりりり
きんをきんすくへりりりりりうりりりりりまで
きりびしてきりやうじをるるきりをきりくりりる。
くくてくくりりのきくにりくきりひきまくりりんりんに
くりりりりり

おもれどずべて世ことゝなりひてごさひろまり
をゝきとゝもみかこれまゝがゝの世と思ふべし。
そこの月をこゝろをもうんさありとれをいぐ〳〵さ
いのぜんごんみかまんあのごうをもうべし
こゝろていくゝごゝにたゝうゆきんありがけふす
神のゐぜのかうもゐふぐ〳〵のまゝにもゐぐやう
せんとすきむぐゝきさいごかゝゐふだゞめゝり
れりまでゞをゝこゝろずとのゝきひてゞ校の
義をゝきてだゝ四よりゝきめたまふりせうそん
ぐやすゝゝわゝひゐひゝふうやゝうゆへうや
ゝゝへていくゝぐゝけふ中のせいかうふあゝ

ふをいぐ〳〵とするふぐちゝこびひ。色のうちよ
あゝゝをいひてちゝづきていぐゝくゞごゝ。ふ中
神んのせのかうもぐよあぎてれゝるゝものをゝを
うすゞごゝ。このゆへよむゝうゞんとりふがゝきのゝ
せうそんぐやゝはゝゝへゐふゝこのかゝりふりのたさ
ゝゝゝものをバだゝゝりうゝるゝこゝろりゝ紅を
この義のこゝろバ分をゝのてゝるべゝゝもあゝび。
こゝろをものてむゝひゝるべゝゝもあゝびぐゝ紙
ものてゝるべゝゝもあゝびぐんくゐをゝずして。
ゝ四ゞやうすゝゝ玉ゝ中をぐ中をゝりてゞゞゞ
こゝろをゝるゝてゝるゝぐゝらをゝりて人よゝふべし

こゝろをたゝん事をおもひて。
さてをほゝきのあぎをひゝ
まひ一こゝろばかりをもて
たゝんばかりのかゝんを
也たりこゝろ人ともいふべ
くんぬ花はこれ三世のたゝぬの世よりて一世う
のかゝをばこゝまつをこの花のいとれるり二十一
そこうどの去そこりこれこゝ大事とこれ事
をり一大事といへどとそせをんの人のたゝくこ
とを一大事といふやうこゝろえ得こゝ大
事とこゝんぐんのでんぐるりかんぐんのでん

とこゝろかゝりのるりのみかゝのこゝ
のごとくたゝりのるりこゝろのこゝ
ぐんのでんぐんのをのくみれもるりこゝ
一大事をたゝんぐんほどこゝのいづくま
をやてこれをこゝ大事こゝ花のいとれをたり
ゝん人こゝのみかゝのこゝ
こゝるりのこゝをるこゝ人こゝの
ほうをもこゝたゝこゝ

こくゝ

寛永九年壬申六月
中野市右衛門刊行

行人ノ一休ーてれを見ても其ヲ行